

A. フレクスナーの学問研究観の歴史的意義と今日的課題：

「役に立たない知識の有用性」（1939年）の検討を中心に

Historical Significance and Problem of A. Flexner's Idea on Research and Learning：

Focusing on the Examination of 'The Usefulness of Useless Knowledge' (1939)

渡辺かよ子 (Kayoko WATANABE)

1. はじめに

本稿は、エイブラハム・フレクスナー (Abraham Flexner, 1866-1959) が1939年秋に発表した「役に立たない知識の有用性」の歴史的な文脈の検討から、その学問研究観の歴史的意義と今日的課題を明らかにしようとするものである。

フレクスナーは、アメリカの大学の研究機能の強化に尽力した教育改革者であり、1910年に発表されたいわゆる『フレクスナー報告書』は医学教育の水準向上に絶大な影響を与えたことで知られている¹。ロックフェラー財団一般教育委員会の事務局長 (1912～1927年)、プリンストン高等研究所の初代所長 (1930～1939年) を歴任したフレクスナーの学問研究観と教育観は、「フレクスナー神話」として教員を含むあらゆる職業の専門職化と専門職教育の資質向上を求める議論の中に生き続けている²。

「役に立たない知識の有用性」において、フレクスナーは研究者の知的な好奇心は妨げられてはならず、学問研究の意義はその有用性とは無関係であるとして以下のように述べている。「好奇心は結果的に役に立つか否かにかかわらず、おそらく近代的思考のとりわけ優れた特徴です。…教育機関は好奇心の育成に務めるべきであり、好奇心は有用性の追求から解放されるほど、人間の幸福のみならず、同じく重要な知的関心の満足に寄与しやすくなります。その知的関心こそが、現代の知的生活を支配する情熱だと言えるでしょう。」³

知識基盤社会と称される今日、学問研究がますます重要性を増していることは論を俟たないが、昨今の高等教育の大衆化とユニバーサル・アクセスによって、学問研究は多様な大学の多種の機能のうちのマイナーなものとなった。様々なタイプの専門知が周期表として捉えられ⁴、専門知そのものも以前ほどは尊重されなくなっている⁵。こうした時代において、学問研究はいかに育まれ、実践や実利、有用性とどのような関係を築くべきなのか。本稿はそうした議論の原点として、フレクスナーが高等研究所を引退する1939年秋に発表された「役に立たない知識の有用性」に焦点を当てたい。

フレクスナーについては、日本においても大学論の翻訳⁶や大学教育論、専門職に関する研究⁷が発表されている。そうした中、最近フレクスナーの「役に立たない知識の有用性」が復刻され⁸、その日本語の翻訳書⁹の出版と共に、多数の書評が発表されている¹⁰。本稿はこれらの議論に学びつつ、殆どの書評が紙幅の関係もあってか十分には論じていな

いフレクスナーと「役に立たない知識の有用性」をめぐる文脈を補完し、その歴史的意義と今日的課題を検討したい。

2. 「役に立たない知識の有用性」(1939年)の復刻

まず、出版後約80年を経て2017年に復刻されたフレクスナーの「役に立たない知識の有用性」について概説しておきたい。フレクスナーの「役に立たない知識の有用性」は1939年10月の *Harper's Magazine* に掲載された2段組み9頁の論稿である。もともとはその原型が1921年の一般教育委員会向けの内部文書に含まれていることから、同稿はフレクスナーが長年あため思考してきた学問研究観の総括的文書ということが出来る¹¹。この論稿が新書版くらいの大きさの93頁からなるハードカバーとしてプリンストン大学出版から出版された。前書き的概説エッセイとしてプリンストン高等研究所の現研究所長ロベルト・ダイクラーフ (Robbert Dijkgraaf, 1960-) の「明日の世界」(2017年) が記され、それに続いて本体であるフレクスナーの「役に立たない知識の有用性」が収録されている¹²。オランダ出身の理論物理学者であるダイクラーフはフレクスナーの論稿に関する簡潔な解説と今後の基礎科学研究の課題を記している。

日本においても同書の翻訳が、2020年夏に理化学研究所数理創造プログラムの企画として理論物理学者の初田哲男の監訳によって出版された。日本語の翻訳版の題目は『「役に立たない」科学が役に立つ』となり、原書の上記の内容の前に、ダイクラーフの「日本語版刊行にあたって」と初田の「監訳者はじめに」が加えられ、さらに英語の原書にはない解説コラムや巻末の登場人物の経歴や理論の概説、日本語参考文献等、数理科学の門外漢にも理解ができるような工夫が施されている。掲載されたフレクスナーの論稿は、「役に立たない知識の有用性」と訳され、本体の書名とは異なる日本語訳となっている。ダイクラーフとフレクスナーの二つの論稿のみを収録した英文原書と比べ、翻訳本は表紙のノアの箱舟の絵や本文の重要性を際立たせている解説等、大変豊饒な内容構成となっている¹³。

一方、2017年にはイタリアの人文学者 Nuccio Ordine(1958-) が自身のイタリア語の著作の英語の翻訳本として *The Usefulness of the Useless* (全176頁) を出版している。同書は第1部で、学問研究は古代から有用性や利益からは無縁であったことを、アリストテレスやダンテ、ユートピア作家等、哲学者や人文学者の言説から歴史的論証を試みている。「会社としての大学、顧客としての学生」と題された第2部では、今日の大学の状況とユーゴーやニューマン、ポアンカレ等が主張する無用の用と、資産としての知識の意味と意義が論じられ、第3部では古典の意義を知識の所有ではない探究としてその有用性を論じている。そして巻末にはフレクスナーの「役に立たない知識の有用性」(1939年) が全文掲載されている¹⁴。Ordine が論証した、有用性とは無関係であると主張され続けてきた人文科学の有用性は、フレクスナーが論じる「役に立たない知識の有用性」が基礎科学のみならず、人文科学を含む全ての学問研究に適用されるべき重要性を持つことを示している。

以下では「役に立たない知識の有用性」が発表される歴史的な文脈として、フレクスナー

自身の経歴と著作における同稿の位置づけと、ドイツからアメリカに学問の中心地を移動させたユダヤ人研究者の受け入れをめぐる状況を明らかにすることで、「役に立たない知識の有用性」の歴史的意義と今日的課題の検討を試みたい。

3. 「役に立たない知識の有用性」の文脈と歴史的意義

1) フレクスナーの生涯と経歴

フレクスナーは 1866 年にケンタッキー州ルイビルの貧しいユダヤ系移民の 9 人の子どもの 6 番目として生まれた。兄の援助の下、ジョンズ・ホプキンス大学で古典と語学を学び学士号を取得し、故郷で 19 年間の予備校での教育実践を行なった後、1905 年にハーバード大学で心理学と哲学を学び、翌年修士号を取得した。その後のドイツ留学を経て出版した母国の大学を痛罵する『アメリカの大学』(1908 年)¹⁵がカーネギー教育振興財団の専務理事ヘンリー・プリチェット (Henry Pritchett, 1857-1939) の目にとまり、フレクスナーはアメリカとカナダの医学校の実態調査を依頼された。その報告書が『フレクスナー報告書』と称される『アメリカとカナダの医学教育』¹⁶である。

同報告書においてフレクスナーは、各校の入学要件や教職員、財務、施設設備に関するデータと共に医学教育の実態を訪問調査し、ヨーロッパとの人口比を根拠に、医学教育の水準向上に向けて医学校の数を 5 分の 1 にするよう、名指しで 120 の医学校の廃校を提案した。目指されたのは、医学研究と病院臨床が一体化した大学院段階の医学教育を行うジョンズ・ホプキンス大学であった¹⁷。医療行為を利潤追求とは無縁の公的なものとする同報告書は、①医学を科学的実験に基づく実証科学とすること、②厳格な入学要件の設定により十分な準備教育を受けた能力ある学生のみ受け入れること、③医者は科学的手法を用いた問題解決学習によって養成されるべきこと、④医学生は医学的事象と科学的思考方法の習得のために講義室以上に実験室と附属病院で学習すること、⑤優れた教師は常に行動的で進取の気性に富んだ研究者であるので医学教育従事者は診療を行うも専任の教員として独創的研究を行うべきこと、を主張した¹⁸。これらはロックフェラー財団からの 500 万ドルの資金提供によって実行に移され、医学校と医学生の減少と共に、科学的医学の確立と医学教育の水準向上、医師の社会的地位の確立がなされた¹⁹。

ロックフェラー財団に転じたフレクスナーは、1914 年にはヨーロッパにおける売春の状況に関する報告書をまとめ²⁰、1915 年にはその後の専門職の定義に決定的影響を与えることになる「ソーシャルワークは専門職か」²¹と題した講演を全米慈善更生会議 (National Conference of Charities and Correction) で行っている。また、この時期にはメリーランド州の教育状況調査²²や、進歩主義教育の実践として著名な Gary Plan の調査報告²³、コロンビア大学ティーチャーズカレッジと連携して自身の教育理念²⁴を活かした Lincoln School の設立に尽力している。1925 年にはヨーロッパ各国の医学教育を比較した報告書を発表し、臨床教育を主体とするイギリスとフランスと、大学での研究を強調するドイツの医学教育を対比している²⁵。1928 年にイギリスのローズ財団の招聘によってオックス

フォード大学で実施した大学に関する連続講演は好評を博し、『大学論：アメリカ・イギリス・ドイツ』²⁶として出版されている。

1930年からはプリンストン高等研究所（Institute for Advanced Study）の初代所長としてアインシュタインやフォン・ノイマン等の米国招聘を実現し、同研究所の基盤整備に奮闘している。プリンストン高等研究所は、バンバーガー兄妹（Louis Bamberger, 1855-1944、Caroline Bamberger Fuld, 1864-1944）の500万ドルの寄付に基づき、フレクスナーの長年の夢であった科学者の楽園を実現することになった。プリンストン高等研究所には学生を教育する義務も、会議の義務もなかった。それは自らの内発的な興味関心に応じた研究を存分に行える、超一流の天才研究者が集う研究機関であった。第二次世界大戦が始まり、「役に立たない知識の有用性」が発表された1939年10月に、73歳のフレクスナーはプリンストン高等研究所を引退している²⁷。

悠々自適となったフレクスナーは、1940年に自伝（*I Remember*）²⁸、1943年には自らを見出し『フレクスナー報告』の依頼をしてくれた天文学者、カーネギー教育振興財団専務理事ヘンリー・プリチェットの伝記²⁹、第二次世界大戦後の1946年には自身が最も尊敬するジョンズ・ホプキンス大学初代学長ダニエル・ギルマン（Daniel Coit Gilman 1831-1908）の伝記³⁰、1952年には基金や財団の社会的役割と今後の課題について自らの巨大財団での経験と実践智を後進に伝える『基金と財団』³¹（*Funds and Foundations*）を著した。フレクスナーは1959年に92歳で逝去し、自伝の大幅改訂版³²が翌1960年に出版されている。

以上のようなフレクスナーの業績を俯瞰すると、「役に立たない知識の有用性」（1939年）は彼のキャリアの最終地点で発表された、それまでの研究促進に向けた尽力を貫く理念と確信の表明ととらえることができる。フレクスナーは上記のように多くの著作や報告書を発表しているが、多くは依頼されたものであり、自身は研究者ではない。その日常は財団や研究所にあってパトロンの意向に従いながら、研究者のために研究遂行に必要な資金の調達と管理運営に励み、社会の多方面の人々の求めに応じて相談や助言を行っていた³³。

2) 1930年代のユダヤ人研究者の受け入れと学問の府の移動

フレクスナーは巨大財団の莫大な資金導入を通じて多彩な教育改革に指導性を発揮し、1930年代にはプリンストン高等教育研究所の初代所長としてアインシュタイン等の著名なユダヤ人学者をナチスから逃れさせ、世界の学問研究の中心地をドイツからアメリカに移行させる立役者となった。当時のアメリカは、国内的には大恐慌への対策としてニューディールを採用し、失業や倒産、労働争議等、厳しい経済的困難に立ち向かっていった。そして当時のアメリカの外交的孤立主義に基づく「戦争回避と国内改革」優先路線は、中立法の成立を経て、第二次世界大戦への参戦に向けて大きく転換していく³⁴。

一方、ドイツでは1933年に全権委任法により独裁を確立したヒトラーが、1935年のニュルンベルク法に基いてユダヤ人の排斥と絶滅に向けた政策を打ち出し、多くのユダヤ人の学者が公職を追放され、公民権を奪われていった。ノーベル賞学者が先導しナチスが支

持した「アーリア物理学」は学会を制覇するに至らなかったものの、「悪法も法」としてナチスに従うか、ナチスに逆らわず巧みにやりすごしか、あるいは戦争を科学のために利用するのか、当時のドイツの研究者は狂乱と苦難の日々を生きていた³⁵。

両親が 1848 年革命後にアメリカに移住してきた貧しいユダヤ系移民の子どもとして幼少期をすごしたフレクスナーは、こうした反ユダヤ主義が表面化する以前から最悪の事態に備え、様々な人的ルートを通じて慎重にユダヤ人学者の受け入れに尽力していた。ユダヤ人の難民救済はフレクスナー家の一族を挙げての課題となっていた。フレクスナーの二人の娘 (Jean Flexner, Eleanor Flexner) は当時、ドイツの大学のユダヤ人学者の苦難と支援の必要以外のことは殆ど話さなかったという。フレクスナーの姪はニューヨーク州知事の秘書としてドイツから追われたユダヤ人の南アメリカへの移動手続きや、1500 人のポーランド人の米国内での住居確保の任に当たった³⁶。

フレクスナーの 1 歳年長の兄、バーナード・フレクスナー (Bernard Flexner, 1865-1945) は、第一次世界大戦後のパリ条約においてイスラエルの国家建設を目指すシオニストの顧問を務め、ユダヤ人の経済的支援を目的とする Palestine Economic Corporation (PEC) の代表を務める弁護士であった。バーナードは、ドイツの大学を追放された学者を支援する緊急委員会を組織し、同委員会にエイブラハムやサイモン等の兄弟も参加した。1933 年から 1945 年までの間に、同委員会は約 500 人の難民学者をアメリカの大学の教育研究職に周旋し、それは反ユダヤ主義的反発を受けないようアメリカ国内全域に分散して目立たないように実施された。プリンストン高等研究所は同委員会が招聘した客員研究員として 11 人の学者を受け入れ、その数は当時の 45 人の客員研究員のうちの 4 分の 1 を占めていた。フレクスナーはこれらの客員研究員の専任職への斡旋にも懸命に努力を重ねていた³⁷。

1939 年 5 月のフレクスナーが高等研究所所長として提出した最後の年次報告書には、以下のように記されている。「わたしたちは画期的な時代に生きている。人類文化の中心が、今私たちの目の前で移動しつつある。かつてそれはアテネに本拠地があった。2.3 世紀後にはイタリアに移り、2.3 世紀後はパリに移り、さらにその後、イギリスとドイツに移動している。今やそれは間違いなく米国へと移動している。…私たちが、勇気と想像力をもって行動すれば、50 年後の歴史家は、この時代に学識の中心は大西洋を渡って米国に移動した、と伝えるであろう。」³⁸

そしてフレクスナーは「役に立たない知識の有用性」で当時のドイツやイタリアで人間の精神の自由を絞めつける取り組みが進行していることに憤り、人間の精神を型にはめ翼を上げさせないようにする人々こそ人類の真の敵であるとして以下のように述べている。「精神の自由を重んじることは、科学分野であれ、人文学分野であれ、独創性よりはるかに重要である。なぜなら、それは人間どうしのあらゆる相違を受け入れることを意味するからだ。人類の歴史を前にしたとき、人種や宗教による好き嫌いほど愚かで滑稽なことがあるだろうか。」³⁹フレクスナーが同稿で主張した知的好奇心そのものの尊重は、以上のような多文化や異文化の尊重、特にナチスによるユダヤ人の迫害に対抗し、人間の自由な

精神性の確保に向けた行動に根ざすものであった。

4. 「役に立たない知識の有用性」の今日的課題

以上の「役に立たない知識の有用性」の歴史的文脈をふまえ、ここからはその今日的課題について検討してみたい。同稿の中核となっている知的好奇心を有用性から解放する意義については、その重要性がいくら強調されても強調されすぎることのない人間の探求行為の原点であり、その理念は今日の教育の中核ともなっている。短期的な成果を求めがちな今日の科学技術政策に猛省を促し、応用研究のみならず未だその有用性が不明な基礎研究も同様に長期的観点から促進することが人類の幸福に貢献するという主張は本質的に正しく、貴重である。しかしながら、私見では、こうした有用性を度外視した知的好奇心の承認と促進について、今日、いくつかの付帯条件を考慮する必要があるように思われる。それらは、科学研究の目的と、保護されるべき知的好奇心の対象範囲に関する問題である。

1) 研究の目的と結果責任に関する倫理

一つは科学研究の目的に関する問題である。人間の知的好奇心から生み出された科学兵器が人類そのものを絶滅に導く可能性をもつに至った今日、果たして知的好奇心はそれがもたらす結果の如何にかかわらず、無条件に認められるものであろうか。第二次世界大戦が始まった当時の状況にあつて、フレクスナーは戦争と科学の関係について以下のように述べている。「今日の世界を覆う雰囲気の中にあつて、強調しておくべきは、戦争をより破壊的であり悲惨なものにする上で科学が果たした役割は、科学活動の無意識の副産物であり、科学者は誰もそれを意図していなかった、ということだ」とし、破壊的兵器が使用されたのは科学者が意図したわけではなく、人間の愚かさのゆえである⁴⁰という。こうしたフレクスナーの見解は未だ核兵器が開発されず使用もされていない段階での言明であるが、果たして今日にあつても同様のことが言えるのであろうか。戦禍の中を迷惑い九死に一生を得た世代が世界的科学者となっている今日⁴¹、こうした経験はどのように科学研究に生かされるべきなのであろうか。

フレクスナーはプリンストン高等研究所退職後、二つの自伝を記している。先述のように、一つは退職直後の1940年、その大幅改訂版が1960年に出版されている。これらの二つの自伝の書かれた時期の間には、科学研究の目的を根底から問い直さざるをえない原爆投下があつた。フレクスナー在任中のプリンストン高等研究所には原爆製造と投下に関与した研究者が何人もいる。アインシュタインは、シラードが起草した「アインシュタイン-シラードの手紙」に署名し、それがマンハッタン計画開始のきっかけとなった。フォン・ノイマンも参加したマンハッタン計画を主導し、ロスアラモス研究所長を務めたオープンハイマーは、戦後、プリンストン高等研究所の所長となっている。これらの研究者とその功績についてはフレクスナーの自伝で触れられているが、被爆者や被験者にとっての科学や研究の目的倫理に関する記述はみられない。

例えば、1960年の改訂版の自伝には、1940年の初版にはなかった以下のようなフォン・

ノイマンへの追悼が記されている。「…数理物理学の方法に関するフォン・ノイマンの造詣は自身のみならず我々の国にも大変な貢献をした。戦争初期の彼の『衝撃波』研究はそれに続く水素爆弾や原子核弾頭ミサイルといった研究の前奏曲であった。逝去の少し前に彼が連邦議会から受けた5万ドルのフェルミ賞は彼の研究に政府当局が認めた価値を示している。」⁴²ゲーム理論については、「…同書で展開されている思考は今日、社会科学と同様、軍事作戦や戦略の問題に適用されている」⁴³と記されているが、それ以上のことは言及されていない。

2) エリート主義と「準備された精神」

第二は、有用性を度外視した知的好奇心の自由な展開と促進の対象は誰なのかという問題である。教育一般にあって、自由な知的好奇心の解放と促進は人間の成長発展に必須の最重要のものであるが、大学や大学院での研究という段階にあっては、そうした特権は限定された個人にならざるをえない。

フレクスナーの大学や研究、専門職養成に関する議論の核心は、高度な研究が示す優秀性であり、超一流の優秀な研究者のみが知的好奇心の翼を広げることが承認されている。一方、そうでない場合、医学教育や教員養成に示されたように、容赦のない厳しい排除勧告が出されている。こうした優勝劣敗的な世界観からすると、フレクスナーは日本の高学歴ワーキングプアのリスクを強いられている若き博士課程の大学院生や、自身の食を確保しながら已むに已まれぬ知的好奇心を満たそうと知的探究に勤しむ在野研究者についてどのような見解を示すのであろうか。

知的好奇心の翼を広げる機会について、フレクスナーは歴史上の偉業を成し遂げた人々の事例を示しながら「準備された精神」(prepared mind)の重要性を強調し、「好機は準備された精神を好む」(Chance favors the prepared mind.)と述べている。「役に立たない知識の有用性」が発表される2年前の1937年に、フレクスナーはブラウン大学の卒業式の講演で「準備された精神」について以下のように述べている。「準備された精神とはなにか。それは人間の経験の歴史と果実を蓄えている精神である。それは教育の過程においてその時その時の異なる課題に対処するのに呼び込まれるものである。それは楽しむのに適合し、人類の精神的経験によって導かれるべきものである。それはパストゥール自身が持っていた一種の準備である。それはあなたが機会を見、わかるように合わせる準備であり、あなた自身の個人的あるいは利己的利益ではなく人類の利益に機会を向けるようなある種の準備である。」⁴⁴

フレクスナーは以下のようにも述べている。「いつも人間の活動のあらゆる分野、新しい分野に空きが生じている。それらを獲得する最善の機会を前にしているのは誰だろう。それは、間違いなく準備された精神を持つものである。」⁴⁵

5. おわりに

以上、フレクスナーの「役に立たない知識の有用性」(1939)の歴史的な文脈の検討から、

その学問研究観の歴史的意義と今日的課題について論じて来た。「役に立たない知識の有用性」は、研究の目的と結果責任に関する倫理の意識化、エリート主義の克服という条件が整うことでその真の力が発揮されると考えられる。

生涯にわたり教育と学問研究の水準向上に尽力し、米国等各国の専門職養成の在り方に今なお多大な影響を与えているフレクスナーの論稿が復刻され、再評価されることは、大変意義深く、決して平穩であったとはいえない彼の経歴を考えると報われたという安堵感を禁じ得ないのは筆者のみではないであろう。直截的で辛辣な批判が、時に不必要で不快な敵対関係を生み出すことがあっても、それが真実で正しいことであれば、後世に評価され支持されることもあるという一つの例証なのかもしれない。

最晩年に記された二つの自伝は大幅な改訂がなされているが、両方ともその結びには1880年代初めの貧しい青年時代に手にした Froude のカーライル伝 (Life of Carlyle) のみすばらしいペーパーバックに記された蠟燭とその蠟燭台に刻まれた言葉「役に立つように自らを燃やす」(I burn that I may be of use.) が引用されている⁴。「役に立たない知識の有用性」の意義を確信し、学問研究の推進に尽力したフレクスナー自身は、他者や国家社会に役立ち貢献することを願い、精神の自由を求めて自身を燃やしていた。

¹ Vevier, C., ed., *Flexner: 75 Years Later*, University Press of America, 1987. Barzansky, B. & Gevitz, N., *Beyond Flexner: Medical Education in the Twenties Century*, Praeger, 1992. Nevins, M. Abraham, *Flexner: A Flawed American Icon*, Iuniverse Inc., 2010. Duffy, T., The Flexner Report—100 Years Later, *Yale Journal of Biology and Medicine* 84, 2011. Kong, Y. et. al., Interpretation of the Function View of Modern University: Reviewing Flexner's Modern University Idea, *Advances in Social Science, Education and Humanities Research*, 322, Atlantis Press, 2019.等。

² Darling-Hammond, L. & Baratz-Snowden, J., *A Good Teacher in Every Classroom: Preparing the Highly Qualified Teachers Our Children Deserve*, Jossey-Bass, 2005, p.ix. (リンダ・ダーリング-ハモンド、ジョアン・パラッツ-スノーデン『よい教師をすべての教室へ：専門職としての教師に必須の知識とその習得』(秋田喜代美・藤田慶子訳)新曜社 2009年 i 頁)等。

³ Flexner, A. The Usefulness of Useless Knowledge, *Harper's Magazine*, 179, 1939, Oct. p.545. (エイブラハム・フレクスナー、ロベルト・ダイクラーフ『「役に立たない」科学が役に立つ』(初田哲男監訳)東京大学出版会 2020年、70-71頁)

⁴ Collins, H. and Evans, *Rethinking Expertise*, University of Chicago Press, 2007. (H. コリンズ・R. エバンス『専門知を再考する』(奥田太郎監訳)名古屋大学出版会 2020年)

⁵ Nichols, T., *The Death of Expertise: The Champaign against Established Knowledge and Why it Matters*, Oxford University Press, 2017. (トム・ニコルズ『専門知はもういらぬのか：無知礼賛と民主主義』(高里ひろ訳)みすず書房 2019年)

⁶ Flexner, A., *Universities: American, English, German*, Oxford University Press, 1930. (エイブラハム・フレクスナー『大学論：アメリカ・イギリス・ドイツ』(坂本辰朗他訳、玉川大学出版部 2005年)。

⁷ 拙稿「A. フレクスナーの高等教育思想に関する考察—専門職化と大学の研究機能の関連を中心に—」『日本の教育史学』(教育史学会紀要)第31集 1988年。Iwabuchi, S., The Pursuit of Excellence: Abraham Flexner and His View on Learning in Higher Education, *The Japanese Journal of American Studies*, 15, 2004.原圭寛「Charles W. Eliot と Abraham Flexner のカレッジ・大学論」『日本教育学会第71回大会発表要旨集録』2012年。今泉有里「20世紀初頭北米における大学と附属病院が連携した医学教育の成立

について：フレクスナー・レポートが構想した専門職教育としての医学教育を中心に」『日本教育学会第71回大会発表要旨集録』2012年等。

⁸ Flexner, A. *The Usefulness of Useless Knowledge*, with a companion essay by Robert Dijkgraaf, Princeton University Press, 2017.

⁹ フレクスナー・ダイクラーフ、前掲書。

¹⁰ Lixin, W., 'Usefulness of Uselessness' and How it Serves Modern Society, *Shanghai Daily.com*, April 14, 2017. Usefulness versus Useless Knowledge, *Nature Materials*, 16, Oct. 2017. Stephens, B. Useless Knowledge Begets New Horizons, *The New York Times*, Jan. 3, 2019. 黒沢大陸「『役に立たない』科学が役に立つ』書評、想定外の成果生む基礎研究の力」『朝日新聞』2020年10月3日。近藤雄生「書評『役に立たない』科学が役に立つ』(エイブラハム・フレクスナー、ロベルト・ダイクラーフ著、初田哲男監訳)『中央公論』2020年11月号。拙稿「知的好奇心の有用性からの解放を主張する『フレクスナー神話』として生き続ける研究教育理念」『図書新聞』3484号、2021年2月20日等。

¹¹ Flexner, A. op. cit., 2017, p.13.(初田監訳、16頁)

¹² Flexner, A., op. cit., 2017.

¹³ フレクスナー、ダイクラーフ (初田監訳)、前掲書。

¹⁴ Ordine, N., *The Usefulness of the Useless*, Translated by A. McEwen, Paul Dry Books, 2017.

¹⁵ Flexner, A. *The American College: A Criticism*, Century, 1908.

¹⁶ Flexner, A., *Medical Education in the United States and Canada: A Report to the Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching*, Bulletin No. 4, 1910.

¹⁷ Ibid.

¹⁸ Ludemeter, K., Commentary: Understanding the Flexner Report, *Academic Medicine*, Vol. 85, No. 2, 2010, pp.194-195.

¹⁹ Starr, P., *The Social Transformation of American Medicine: The Rise of a Sovereign Profession and the Making of a Vast Industry*, Basic Books, 2017.

²⁰ Flexner, A., *Prostitution in Europe*, Bureau of Social Hygiene, Century, 1914. 同報告書はドイツ語とフランス語に翻訳されている。

²¹ Flexner, A., Is Social Work a Profession? *Studies in Social Work*, No.4, 1915.

²² Flexner, A., & Beckman, F., *Public Education in Maryland: A Report to the Maryland Educational Survey Commission*, General Education Board, 1916.

²³ Flexner, A., & Beckman, F., *The Gary Schools: A General Account*, General Education Board, 1918.

²⁴ Flexner, A., *A Modern School*, General Education Board, Occasional Papers, No. 3, 1919.

²⁵ Flexner, A., *Medical Education: A Comparative Study*, Macmillan, 1925.

²⁶ Flexner, A., 1930, op. cit. (フレクスナー、坂本他訳)

²⁷ Batterson, S., *Pursuit of Genius: Flexner, Einstein, and the Early Faculty at the Institute for Advanced Study*, A K Peters, 2006.

²⁸ Flexner, A., *I Remember: the Autobiography of Abraham Flexner*, Simon and Schuster, 1940.

²⁹ Flexner, A., *Henry S. Pritchett: A Biography*, Columbia University Press, 1943.

³⁰ Flexner, A., *Daniel Coit Gilman: Creator of the American Type of University*, Harcourt Brace and Company, 1946.

³¹ Flexner, A., *Funds and Foundations: Their Policies, Past and Present*, Harper & Brothers, 1952.

³² Flexner, A., *Abraham Flexner: An Auto biography, A Revision, Brought up to Date, of the Author's I Remember, Published in 1940*, Simon and Schuster, 1960.

³³ Bonner, T. N., *Iconoclast: Abraham Flexner and a Life in Learning*, The Johns Hopkins University Press, 2002.を参照。

³⁴ 安藤次男「第二次大戦前におけるアメリカ孤立主義と宥和政策」『立命館国際研究』14-1、2001年を参照。

³⁵ 池内了「軍事と科学—ナチスドイツと JASON」『天文月報』110-12、2017年12月参照。

³⁶ Bonner, op.cit., pp.264-266.

³⁷ 同上。

³⁸ Institute for Advanced Study Historical Working Group, *A Refuge for Scholars: Present Challenges in Historical Perspective*, p.8. (<https://library.ias.edu/refuge>)

³⁹ Flexner, A. op. cit.,1939, p. 550. Flexner, A. op. cit., 2017, pp.78-79.(初田監訳、93頁)

⁴⁰ Flexner, A. op. cit.,1939, p. 546. Flexner, A. op. cit., 2017, p.60.(初田監訳、73-74頁)

⁴¹ 例えば益川敏英『科学者は戦争で何をしたか』集英社 2015年。

⁴² Flexner, A. op. cit.,1960, p. 259.

⁴³ Ibid., p.260.

⁴⁴ Flexner, A., The Prepared Mind, *School and Society*, Vol. 45, No. 45, June 26, 1937, p.866.

⁴⁵ Ibid., p.869.

⁴⁶ Flexner, A., op. cit., 1940, p.405. Flexner, A., op. cit., 1960, p.292.